
鏡の国戦記～EPISODE SHAMAI・5～『シャマイ・マーメイド2』

亜玲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鏡の国戦記（EPIISODE SHAMAI・5）『シャマイ・マーメイド2』

【Nコード】

N3894D

【作者名】

亜玲

【あらすじ】

黒派撃退の功により、正式にシャマイ村に受け入れられることになったイーナ、ヴィータ、ワコジの三人。やっと平和な日々が訪れると思った矢先、衝撃の真実が明らかになる――

第1話

※第1話※

痛いほどの視線に含まれる意味などおそらく、本人はまったくわかっていないだろう。

「イーナ……あ、あのさ……」

「ん？　なんだ？」

小首を傾げる少年を、ワコジーは視線からかばうように隣に引き寄せた。

「わわっ！　どうしたんだ？」

「や、なんつか……」

黒派討伐を終えたその足で、ワコジーとイーナはジンにつれられシヤマイ村へと戻ってきていた。

族長暗殺未遂事件への警戒から一転、黒派の滅亡と言う喜びのニュースに沸き立つ村は、夜だと言うのにモランたちがざわめき、樂しげに会話したり踊ったりしている。

だが、そのざわめきが、自分達が歩く道にそって次々と止んでいく。

その原因は一つ。

「だ、だれ……？」

「わぁ……」

「かわいい……」

あちこちからあがる夢見心地な感嘆の声。

老若男女、イーナを見た全ての者は、頬を染め、ため息をつき、その神がかった美貌に魂を抜き取られたようになっていた。

「なあ、やっぱり皆、俺のこと怖がってるのか？ 族長を殺そうとしたんだし……」

しかしイーナは周りの反応を違う意味に解釈していたらしい。以前表情に乏しい顔に、わずかな不安をよぎらせる。

「そ、それはないと思うけど……」

「そうかそんなに心配かワコジー。ならおじさんがイーナを抱っこして行ってやろう」

返答に迷うワコジーに、すかさず前を歩くジンが口を出す。

「だぁーっ!! 何考えてんだ変態オヤジっ!!」

「ワコジー! 恩人にむかって怒鳴ったりしたらだめ!!」

くつくつと笑うジンに今にも飛び掛かろうとしていたワコジーを止めようとしたのだろう、イーナの細い体がワコジーに抱きついてくる。

「――っ!!」

とたん、沿道からあがる声にならない叫び。

「なんだ彼氏もちかよ!!」

「あんなガキにつ……!!」

「つかあのたらこ唇誰だよ!!」

「……っ……」

不思議そうな顔をするイーナとついに爆笑しはじめたジンに、ワコジーはいたたまれない気分になった。

「おや、お帰りなさいジン。ご苦労様でしたね」

夕方には惨劇の舞台となっていた族長の屋敷も、いまはきちんと元どおりに片付いている。

その玄関口にたたずむ、全身を赤チェックの布で覆った女が、ジンたち三人を見て労いの声をかけた。

「ああ、マヤン。ほれ、こっちがワコジーで、このカワイ子ちゃんがイーナだ」

「マヤン?!」

どこかで聞いたことのある名前に、ワコジーはマヤンと呼ばれた女

を凝視した。なんか見覚えが……

「ぐああっ！」

「ワコジー?!」

しかし、思い出そうとすると腹が痛くなる。足とおしりをびくびくさせながら、ワコジーは

「だいじょぶだ」と答えた。

「ふむ。君たち、色々と苦勞をかけてすみませんでしたね。さあ、中にお入りなさい。ヴィータくんがお兄ちゃんの帰りを待ちわびてますよ」

『お、男?!』

野次馬たちの悲痛な叫びを背中に、マヤンに続いてジンたち三人も族長の屋敷へと足を踏み入れた。

「あ！ 兄ちゃん！！ にいちゃん！！！！」

応接間に入るとすぐ、兄の姿を確認したヴィータが駆け寄ってきて、思いつきりイーナに抱きついた。

「ヴィータ！ よかった……怪我してないか？！」

「うん、へーきだよ！ さびしかったよお……ふえ……」

甲高い声で泣きだすヴィータの背を、イーナの薄い手が優しくなでる。

「大丈夫……もう、怖い思いしなくていいから……」

「よかったなヴィータ！」

ワコジーもヴィータの頭を撫でる。

「ワコジーさんも、いっしょに、いて、くれるの？」

「おう！　ずっとトモダチだぜ！！」

ニカッと笑うワコジーの肩を、マヤンがつつく。

「君、ちょっとその件で相談があるんですけど」

「へ？」

「続く」

第2話

✦第二話✦

「君たちの処遇について、話があるのです」

マヤンは抱き合う兄弟とワコジーを見ながらゆっくり言った。

「しょうぐう……お、俺たちやっぱり……」

マヤンの真っ黒な瞳に言い知れぬ不安を感じ、イーナは弟を抱き締める腕に力をこめた。

「ああ、そんなに心配しないでください。君たち兄弟は赤派に迎え入れます……私の養子としてね」

「よう、し?」

聞き慣れない言葉に首を傾げるイーナの肩にさりげなく手を置きながら、ジンが頷く。

「子供、って意味さ……なるほど、いい案だな」

「子供……俺たちが、あなたの、子供に？」

「ええ。私にも家族がない、君たちにも家族がない。ならば私たちが家族になればいいことですよ」

瞳をわずか輝かせて喋るマヤンに、イーナとヴィータは顔を見合わせた。

「ヴィータはどうだ？」

「ぼく……ぼく……兄ちゃんがいればさみしくない、けど、やっぱ

り母ちゃんもほしい！」

笑顔を浮かべるヴィータに、マヤンも嬉々として頷きまくる。

「ええ、ええ、そうでしょうとも！ 君たちはまだ幼いのですから！ イーナくんも、もう一人ですべてを抱え込む必要もなくなりますよ！！ 家族とは、そういうものです。もう安心して、誰かに頼っているですよ」

そしてマヤンは兄弟に歩み寄ると、二人を抱き締めた。

「今までよく、耐えぬきましたね。でも、もう哀しい想いはしなくていいんですよ……」

「かあ、ちゃん……」

「母さん……」

マヤンの腕のなかで、まるで堰が壊れたかのように、二人は大粒の涙を流し、声をあげて泣きじゃくった。

「うん、いいな……」

イーナの泣き顔を見つめながらなにやら満足気にうなるジンを、ワコジーは思いつきりこづいた。

「おいおっさん！ あの女、なんなんだ？　つか俺、忘れられてねーか？」

「あの女はマヤン・ミラキ。シャマイ1の呪術師にして、族長に次ぐ権力を握る宰相だ。……不思議なんだが、いつのまにかシャマイに現われて、何百年もあの姿でいるらしい……」

「そ、それって……」

空恐ろしくなり、ワコジは深く考えるのをやめた。

「さて、ワコジくん」

「は、はひ?!」

なぜかマヤンの声に恐怖を覚え、答える声が裏返る。変声期だしし
ようがない。

「よくぞこの二人を助けてくれました……以前から黒派が幼い子供
を暗殺者にしたてあげている、と言うのはわかっていたのですがな
かなかどうすることもできず……本当にありがとう」

「は、はあ」

恐々と頷くワコジに、兄弟の背をさすりながらマヤンはさらに言
葉を続けた。

「この子たち同様、我々シャマイはあなたのことを歓迎します。これからはあなたも、我々シャマイの一員として実りある人生をすごしてください」

「あ、ありがとうございます！」

てつきり追い出されるかと思っていたところだが、予想外にやさしい言葉をかけられ、ワコジは深々と頭を下げた。

「マヤン、こいつも赤派にいれるのか？　なんなら自立するまで俺のところに置いてやってもいいが……」

ジンが眼鏡の位置を直しながら尋ねる。

「ええ、それについてなんですけど……先程ワコジくんのお父様にお会いして、お礼を申し上げてきたんです」

「へ？ いつの間に?!」

ワコジーが父と別れてからここにたどり着くまで、そんなに時間はなかったはず……

「うるさいですね、あなたは気にする必要はありません」

ぼそつとマヤンがつぶやくと、ワコジーの腹が盛大に鳴った。

「うゝ……」

悶絶するワコジーを無視して、マヤンが続ける。

「それで、陛下がですね、『あいつは皇太子な上に末っ子だから甘やかされて育ってきた。だからこれからはビシバシ鍛えてやってくれ』と直々に私に……」

「く……くそおやじいっ……!」

またジンが笑いだすのを横目に、ワコジはマヤンに尋ねた。

「そ、それで俺は、どうすりゃいいんすか？」

「ふむ。君には……」

マヤンの瞳が、怪しく輝いた。

「赤派側の密偵と言う形で、青派に入ってもらいます」

「続く」

第3話

✱第三話✱

「マヤン……バレバレすぎやしないかねえ……」

マヤンの発言に、さすがのジンも厳しい表情を浮かべる。

これから先も確実に、ワコジーとイーナ、そしてヴィータの友情は続くだろう。

20

青派の連中だって、今はまだ子供だが、クホやアナキアあたりがそれに気付かないほどバカだとは思えない。

せっかく助けだした少年たちに、さらに茨の道を歩かせるなんて……

「そんなに深刻にならずとも、大丈夫ですよ」

しかしマヤンは、思考の読めない瞳を細めて言葉を続ける。

「確かに密偵としての役目も担ってほしいとは思いますが。でも、それ以上にワコジークン、君やイーナたちには、青派と赤派の懸け橋になってほしいのです」

「で、でもイーナやヴィータはともかく、俺なんて完璧ヨソモノだ……っすよ?!」

「だからこそです」

ワコジークンの反論に、マヤンは淡々と答えた。

「君たちと同世代の子らは、生まれた時から赤派と青派の対立の中にあり、わけもわからず憎しみあっている……そこから憎しみの種を取りのぞくのは、容易なことではありません。ですが、君ならば客観的に、公平に、二つの派閥を見ることが出来る。そしてイーナ

とヴィータは知りすぎているからこそ、その争いの虚しさや哀しさを理解できる。そう、思いませんか？」

最後の一言はジンに向けられる。

「(うそだな……)」

表面上、神妙に頷きながらも、ジンは頭の中でそうつつこんでいた。

基本能天気で温厚な赤派の連中は、何も好きこのんで青派を憎んでなどいない。青派に友人を作ってしまうような者もいるほどだ。結局は、平和が一番と考えている証拠だ。

だが、青派は違う。青派の連中特に幹部クラスには、明確かつ危険な信念がある。

この溝は、もはやヨソモノだろうがなんだろうが、埋めようがない。

「（まあ、お互いまだ子供だ……）」

そう割り切ると、ジンはさっそくマヤンに提案した。

「それはわかったが、ワコジーはどこに住まわすんだ？ 青派に入るとなると……軍隊寮しかない気もするがねえ」

「ええ、私もそれしかないと思ひましてね。もうワコジーくんの部屋を確保しておきましたよ」

「はやっ！ つか寮ってなんすか？！」

シャマイ村には、モランたちの軍の大規模な訓練場がある。

普段モランたちは決められた時間そこを拠点に訓練や雑務に励み、給料を支給される。

だが、家が遠い人や家族がない者のために、特別に男女それぞれの

寮が設けられているのだ。

「本当は15歳以上じゃないと入居できないんですけどね、私が話を通しておきましたから大丈夫。生活必需品はもう全部搬入してありますから、今からでもすすめますよ」

そのあまりの手際よさに怯えながらも、ワコジーは

「ありがとうございます」と頭を下げた。

その後、もう夜も遅いと言うことで、イーナとヴィータはマヤンの家に、ワコジーはジンに連れられて寮に、それぞれ帰ることとなった。

「あとの細かいことは全部私に任せて、君たちはまずこの村に慣れることです。幸いにも今は夏休みですし、友達も作りやすいでしょう」

マヤンの家への道と、寮への道の分岐点で、マヤンが三人の子供たちにそう言った。

「夏休み？ ……まあいや。イーナ、ヴィータ、明日の朝遊びに行くからさ、一緒に村まわろうな！」

疲れた頭でこれ以上考え事するのはあきらめ、ワコジはイーナとヴィータに約束をとりつけた。

「わーい！！ あそぼ、あそぼ！！」

はしゃぐヴィータに、イーナも少しだけ穏やかな顔で頷いた。

「うん、そうしよう……あ、ワコジー！」

そして何かを閃いたようにワコジに歩み寄り、

「お休み、また明日な！」

「っ……お、おおっ！！！」

イーナはすっかりそれが正式な挨拶だと思い込んでいるのだろう。

が、真面目な顔で唇を押しあてられたワコジのほうはと言えば、
恥ずかしさと、認めてはいけない気がする感情とで、顔から火が噴
き出さんばかりになっていた。

「羨ましいよワコジ……おじさんもしてほしいなあ……」

「だ、誰がさせるかっ！……！」

どこか拗ねた声で呟くジンの横腹に軽くパンチをいれ、ワコジーはイーナたちに手を振ると、寮への道を足早に歩き始めた。

「(どうしよう……男なのに……かわいすぎるっ……)」

「続く」

第4話

※第四話※

「お、お、おはようございます!!」

遠慮がちにノックした扉が、誰も触れていないのに勢いよく開いた。

「あ、ワコジーさん! おはよう!!」

中で興味津々に何かを見ていたヴィータが、恐々とミラキ家の玄関に立つワコジーに気付き、満面の笑顔で手をふり駆け寄ってくる。

「おっすヴィータ! 元気か?」

とりあえずマヤンがいないようなので安心したワコジーは、足にしがみつくヴィータの頭を撫でながらニカッと笑う。

「うん、元気!! にいちゃん!! ワコジーさんきたよ!!!!」

「わかった」

奥の方から澄んだ声が聞こえ、イーナが姿をあらわし、

「お、おまつ……どうしたんだよそのかつこ……?!」

「ん? ああ、これか?」

わずかに不思議そうな顔で、イーナは身に纏う純白のフリルエプロンの裾をひっぱった。

「マ……えと、母さんが、料理できないって言うから、俺がかわりにやることになって……んで、今朝早くジンさんが来てな、料理を

する時はちゃんとこれ着なきゃだめ、って置いてってくれたんだ」

「んの変態オヤジっ！！！」

神妙な顔で説明するイーナに、ワコジは顔を真っ赤にしながラジンへの悪態をついた。

人魚だって、ちょっとした衣服は着る。その感覚は、人間のものと大差ないはずだ。

そしてその感覚が間違っていなければ、普通男はフリルのエプロンなどしない。

「なあワコジ、顔が赤いぞ？ 熱でもあるんじゃないのか？」

「え？」

イーナのあまりにも可愛らしい姿に気をとられるあまり、その顔が接近してきていることにワコジは気が付かなかった。

「ん……微熱？」

「っ……!!」

イーナのひんやりとした額がワコジのほてった額に押しあてられ、ワコジは声にならない叫びをあげた。

「おまえ、い、い、いつもそうやって……?!」

「え？ あ、ああ、ヴィータたまに熱出したりするから」

何でもないように言うイーナに、ワコジはとりあえず気持ちを落ち着けようと深呼吸した。

「あー……えとさ！ 今日、シャマイ村を色々見て回ろうぜ！！
この前来たときんじゃ足りねーからさ！」

「うん、そうだな」

「わーい！！ おさんぽ！！」

はしゃぐヴィータとさっそくエプロンをとって支度するイーナを眺め、ふと、まだイーナの笑顔を見ていないことに思い当たる。

「（笑ったら、きっと、もっとかわいい……かわいい？！）」

「なにしてるのさワコジーさん！ はやくいこう！！」

「あ、おう！！」

ヴィータに手をひっぱられ、ワコジーたち三人は、朝のシャマイ村へと繰り出した。

「おい！ あの子だぜあの子！！」

「マヤン様の養子になったって聞いた……」

「かわいいなあ……男でもあんだけかわいけりや……」

「あんなかわいい兄弟初めて見たわ！」

「なあ結局あのたらこ唇は誰なんだ？」

昨晚からの興奮冷めやらぬ様子の村人たちの間を、三人はゆっくりと歩いていた。

「誰がたらこだっ……!!」

イーナとヴィータの神がかった美貌に比べれば、自分などたいしたことはないだろう。

「そんなにまずくはねーはずなのに……」

確かにワコジも、美形の部類に十分入る。だが本人的にはチャームポイントだと思っている厚めの唇が、美の神と並んではあだとな

っているようだ。

「ねーねー、あそこにこーえんあるよ！ あそこであそぼー！！」

「いいか、ワコジー？」

ヴィータの指差す先には、

「シャマイ公園」とかかれた札が入り口にたてられた広場がある。

「おう、いいぜ！ あそこなら、友達できるかしんねーし」

「わーい！！」

「あ、こらヴィータ！ 走っちゃだめ！！」

「はやくはやくーはぶあっ！！！！」

「わっ！」

はしゃいで駆け出したヴィータが、兄たちの方に目を向けた瞬間、公園の入り口に立っていた幼い女の子に激突してしまった。

「いたーい！」

「ご、ご、ごめん！！」

転んで泣きだす女の子に、ヴィータが焦って手を差し伸べようとすると……

「おいア・ヤカーだいじょーぶー？」

「こらくそガキ！ 謝れ！！」

公園の奥から、ワコジーやイーナと同じ年くらいの少年と少女が駆け寄ってきた。

「続く」

第5話

※第五話※

「わーん！ れらっかーたくちゃーん！！」

相変わらず泣きじゃくる女の子――ア・ヤカに駆け寄った二人に、イーナがあわてて謝る。

「ごめん。こいつ、俺の弟なんだ。ちゃんと注意しとくから」

「ん？ あー！ あんた、昨日マヤン様のところに来てた！！」

「あ、よーしになったってやつだろ！！」

すると、イーナを見た二人が興奮気味に身を乗り出す。

「うわーマジかわいいなあ……あ、アタシ、レラツカ・ブ・ルコー！
んで、こいつはアタシの幼なじみのタク・ツツチ！ 見た目怖
いけどアホだから！ んでーこの子はア・ヤカ・ミカ！ アタシら
の妹みたいなもん！！ よろしくねー！！！」

満面の笑顔で一氣にまくしたてるレラツカに、少しとまどいながら
もイーナはうなずいた。

「う、うん。あ、俺はイーナ・ミラキ。こいつは弟のヴィータで、
こっちは、友達のワコジー。よろしくな」

「だれがアホだって……あ、なあ、一緒に話そうぜ！ 俺たちちよ
ーどひましてっから」

「いいのか？」

タクの提案に、イーナが小首を傾げる。

「あ、ああ」

その仕草にわずかに頬を染めるタクを見て、無性にイラッときたワコジーが口をはさむ。

「おいっ、言っとくけど、こいつ男だぜ！」

「は？ お……男?!」

「うわっ何アンタ、知らなかったのー？ バツカだなー昨日から噂になってたのにー」

ケタケタと笑うレラツカに、今度は恥ずかしさで真っ赤になりながらタクが反論する。

「う、うつせーなっ！ だ、だいたい男のこいつがこんなにかわいいのに、テメーには可愛げがまったく感じられねー!!」

「なっ…言ったなー！！　アンタこそ男のくせに暗がり怖いとか度胸なさすぎっ！！」

「うっせー！！　お前こそ」

「「けんかはだめー！」」

いつの間にか仲直りをしたらしいヴィータとア・ヤカが、二人並んでタクとレラツカに叫び、二人は瞬時に静かになる。

「ワコジー、あの二人、仲良しだな」

「……そうか？」

その後6人は、公園の一角の木陰に陣取り、たわいもない話に花を咲かせた。

シャマイ村の慣習や人々の暮らし、同世代の変り者、などなど、およそイーナたちが知っておくべき知識が一通り（主にレラツカの口から）解説された。

「なあ、ところでさ、おまえらはどこから来たんだよ？ 俺たちの話ばっかじゃつまんねー」

シャマイの話に一区切りが付いたとき、タクが興味深げに切り出した。

「あーえっと、俺はさ」

イーナの過去をそう簡単に明かしていいものなのか判断がつきかね、ワコジーはまず自分の身の上から話すことにした。

「俺、マーメイド帝国の皇太子。人間に憧れて、海の魔女っつーか……結局はお父様か？　に魔法かけてもらって、人間になったんだ」

どこか懐かしい沈黙が、6人の間を流れる。

「ぷっ……だっはー！！　あんたみたいのが人魚？　マーメイド？
！　つか皇太子？！」

「ぎゃーっはっはっ!! おい、あんま笑わせんなよなっ! あーくるし……ひーっひっひっ!!!!」

大爆笑しはじめるレラツカとタクに、ワコジは唇を尖らせて反論する。

「マジなんだって!! 俺、人魚なんだって!!」

「でもーうろこないよー?」

ア・ヤカがヴィータの髪をみつあみにしながら言う。

「だからー人間にしてもらったから、もおウロコはねーのっ!」

「つまんなーい……はい、できたよヴィータ!」

ヴィータの髪が五本のみつあみに分けられているのを横目に、イーナも話に加わる。

「ワコジーは、ほんとに人魚なんだぞ。俺、ワコジーに助けてもらって……」

「イーナが言うなら信じてあげる」

「まあ、イーナはうそつかないさーだしな」

「おい、何その差!!」

態度を一変させたレラツカとタクは、今度はイーナに話をふる。

「イーナは？　イーナも人魚？」

「見た目シャマイだけど、お前みたいなの見たことねーしな」

「あ、えっと……」

イーナが困ったようにワコジーを見つめる。

それはそうだろう。せっかくできた友達に、自分が暗殺者だったな
どと告げたら……

きつと、まだ子供な自分達ではうまく説明できない。だから、これ
はマヤンやジンに任せておくべきなのだろう。

「ごめん、こいつのことは、今は言いたくねーんだ」

「ワコジー……」

ワコジーの神妙な口調に何かを悟ったのだろう、レラツカとタクは
それ以上追求してこなかった。

「ま、それはまた今度でもいいーよね！ イーナかわいいしゆるしてあげる！」

「おう、それよりさ、昼飯くって遊ぼうぜ！！」

気が付けば、朝のさわやかな空気はいつのまにか、昼の熱気へとかわりはじめている。

「おなかへったー！」

「僕も！」

手をつないで立ち上がるヴィータとア・ヤカの無邪気な声に、四人もつられて立ち上がる。

「よしや！　じゃ、行こうよ♪　うまい食堂があるんだー！」

「おら行くぞちびども！」

「行こうぜイーナ！」

「うん。あ！」

イーナは小さくつぶやくと、

「ワコジー、ありがとな」

それがさっきのワコジーの気遣いに対するものなんだ、とか

イーナはこれが挨拶だと思い込んでるんだ、とか

そんなこと説明する暇もないままに、

「……?!」

「きゃー!」

タクとレラツカの目の前で、ワコジの唇はイーナのそれに奪われた。

「続く」

第6話

⌘第六話⌘

それからの1週間は、イーナたち兄弟にとっても、ワコジーにとっても、楽しく有意義なものとなった。

レラツカたち三人は、イーナたちをあちこち連れ回し、色々な人会わせてくれた。どの子も個性的な面々ばかりで、彼らと話すたびに、イーナの顔が少しずつ柔らかくなっていった。

「おはよーイーナ♪」

「はよ。あれ？ あの魚ヤローはどーした？」

「ヴィータおはよう！」

そして今日もまた、6人で遊ぶ約束をしていたのだが……

「今日な、ワコジー、青派に『カオミセ』に行かなきゃいけないんだ。だから、今日はこれない」

淡々と説明するイーナに、レラツカが不思議そうな顔をする。

「あいつ、青派に入んの？ あ、あれだ、マヤン様の作戦だなー？」

「うん、母ちゃんが、みってーもがつ！」

「こらヴィータ！ 言っちゃだめ！」

ア・ヤカの隣でなにやらうきうきしているヴィータの口を、イーナが慌てて両手でふさぐ。

「やっぱしな……ま、いーや、青派だろーがあいつはあいつだろ、気にしねーよ」

本当に何も気にしていない口調でそう言うと、タクは皆に提案した。

「んじゃ、今日は探険はいったんやめて、また公園で遊ぼうぜ！」

公園は今日も、子供から大人まで、楽しそうな人々で賑わっている。

公園の中に作られた小さな丘の上に車座になり、イーナたちはまた話に花を咲かせていた。

「なあ、たーくん」

タクくん、と言うのが言いづらくて自然、舌足らずな呼び方をしてしまうイーナに、タクが穏やかな目を向ける。

「あ？」

「それ、なんだ？」

イーナが指差すのは、タクが腰にぶら下げている不思議な飾りだ。

「あーこれか。タクの憧れの人のカタミだよ！」

レラツカがその飾りを指でいらいながら答える。

「あこがれのひと？」

ア・ヤカと一緒に花輪を作っていた手を休め、ヴィータも尋ねる。

「ああ、俺のオジサン。父ちゃんの弟だ」

レラツカにされるがままになっている飾りをぼんやりと眺め、どこか哀しげにタクがつぶやいた。

「すっげーかつこよくてさ……村でも人気のモランだったんだ。オジサンの槍さばきは、みんなの憧れだったんだぜ！」

「うんうん、かつこよかったよね！ アンタのおじさんじゃないみたいで」

「うっせー！」

レラツカのおでこをぺちっと叩くと、タクは自由になった飾りを握り締めた。

「これ、オジサンの使ってた槍先なんだ。オジサン……半年前に、死んじゃったんだ」

「あ……そうだったのか」

顔をわずか曇らせるイーナに、タクは明るく答える。

「お前がそんな顔すんなよ！ オジサン、族長を守って、モランの誇りのもとに死んだんだからさ！」

「え……？」

「黒派とか言ったっけ？ あいつらの一人にな……俺、立派なモランになって、あいつらに敵討ちしてやるんだ！」

凜とした声で決意を表すタクにしかし、レラツカがすかさずつこむ。

「アンタばかり？ この前、黒派はカイメツしたっておふれでたじゃん！」

「そーだよーヴィータがきたひにいわれたよー」

ア・ヤカにまで言われ、タクが気まずい顔をする。

「だ、だーからっ！ そのくらいの意気込みでっつーことだよっ！
！……ん？ お、おい、イーナ？！」

「ちょ、だいじょうぶ?！」

「イーナちゃん?」

「に、兄ちゃん?！」

小刻みに体を震わせるイーナの美しい顔は、血の気がひいて真っ青になっていた。

「続く」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3894d/>

鏡の国戦記～EPISODE SHAMAI・5～『シャマイ・マーメイド2』

2010年10月14日17時58分発行